

# 学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論文提出者	村田 雄子
論文審査委員	(主 査) 朝日大学歯学部 教授 堀田 正人 (副 査) 朝日大学歯学部 教授 竹内 宏 (副 査) 朝日大学歯学部 教授 江尻 貞一
論文題目	
ヒト慢性根尖性歯周炎の basic fibroblast growth factor とその receptor の発現性	
<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>本論文は臨床的に難治性の慢性根尖性歯周炎は肉芽腫が形成され、線維芽細胞や血管内皮細胞の増殖因子が関係していることが免疫組織化学的に観察されているが、塩基性線維芽細胞増殖因子 (bFGF) は染色陽性細胞の発現か、そのレセプター (FGFR) のリガンドなのか判別できていない。そこで、ヒト慢性根尖性歯周炎である化膿性根尖性歯周炎 15 例、歯根肉芽腫 15 例、歯根嚢胞 20 例を供試し、病巣の肉芽組織の成熟度によって I 型と II 型の病型に HE 染色とマッソン・トリクロム染色により大別された。I 型は線維成分が少なく細胞成分の多い、幼弱な肉芽組織、II 型は線維成分が多く細胞成分の少ない成熟した肉芽組織である。これらの病巣に塩基性線維芽細胞増殖因子 (bFGF) 抗体、そのレセプター (FGFR) 抗体、マクロファージのマーカである CD68 抗体を用い、免疫染色を行った。さらに、塩基性線維芽細胞増殖因子 (bFGF) の発現細胞を特定するために in situ hybridization の RNA-DNA hybridization 法を行い、免疫組織化学的方法によって同定したものである。</p> <p>その結果、免疫染色所見から CD68 陽性細胞は化膿性根尖性歯周炎、歯根肉芽腫、歯根嚢胞の I 型、II 型とも常にみられた。bFGF はいずれの慢性根尖性歯周炎も、I 型は炎症性細胞、線維芽細胞、血管内皮細胞に陽性を示し、II 型は炎症性細胞の陽性が減少し、線維芽細胞、血管内皮細胞に陽性が多くなった。FGFR は炎症性細胞には染色性はなく、線維芽細胞、血管内皮細胞に限定的に発現された。in situ hybridization 所見から bFGF の発現細胞はマクロファージ、線維芽細胞、血管内皮細胞の 3 種類で、病型により比率が異なっていた。化膿性根尖性歯周炎の I 型はマクロファージ、II 型は線維芽細胞、血管内皮細胞、歯根肉芽腫の I 型はマクロファージ、線維芽細胞、血管内皮細胞、II 型は線維芽細胞、血管内皮細胞、歯根嚢胞の I 型はマクロファージ、線維芽細胞、血管内皮細胞、裏装上皮、II 型は線維芽細胞であったとしている。このことから、ヒト慢性根尖性歯周炎の病巣における肉芽腫の形成には根管細菌の持続的侵襲のみでなく、線維芽細胞と血管内皮細胞がオートクリン的な bFGF による増殖と、マクロファージの bFGF によるパラクリン増殖の両方があることを明らかにしている。</p>	

以上より審査委員は本論文が難治性のヒト慢性根尖性歯周炎の病巣は増殖因子の発現とオートクリンとパラクリン的な肉芽組織の増生が絶えず繰り返され、長期の肉芽腫形成に関係していることを明らかにしたものであり、しかも歯科臨床に極めて価値ある所見を提供したものであり、博士（歯学）の学位を授与するに値するものであると判定した。